

平成18年度センター試験追試験問題を用いた 都内国立大学1年生の英語学力の新旧課程比較

橋本 貴充*

要 約

平成11年に高等学校学習指導要領が改訂され、その課程の下で高校教育を受けた初めての受験生が平成18年に大学を受験し、入学してきた。従来の学習指導要領に基づいて高校教育を受けた者と、新しい学習指導要領に基づいて高校教育を受けた者との間に、学力の差はあるだろうか？ それぞれの課程で教育を受けてきた学生の特に英語の学力に着目し、それを調べるために、本研究では、平成18年度センター試験追試験問題の、英語（筆記）および英語リスニングの平均点を、旧課程で高校教育を受けた者と、新課程で高校教育を受けた者の間で比較した。被験者は都内の国立大学の1年生とし、旧課程で教育を受けた学生に対しては平成18年1月に、新課程で教育を受けた学生に対しては平成19年1月に調査を行った。その結果、在籍大学の影響を統制した場合、筆記でもリスニングでも、両者の間に5%水準で有意な平均値差はなかった。また、どの分野が得意かを調べるために、大問得点を従属変数とする分析も行った。その結果、ほとんどの大問において、5%水準で有意な平均値差はなかった。ただし、この調査は、旧課程群も新課程群も、1年度ずつの学生しか対象にしていない。また、この調査の対象は、難関とされる国立大学に合格した者のみであるため、それぞれの課程で高校教育を受けた学生を代表しているとは必ずしも言えない。したがって、この結果を一般化して、旧課程で教育を受けた者と新課程で教育を受けた者の間に英語学力がないと断定するためには、さらなる分析が必要である。

1 目 的

「1999年に火がついた「学力低下」論争は、マスコミとさまざまな分野の論者を巻き込み、いつしか「学力低下」は現在の教育を語るキーワードになった感がある。」と市川(2002)が述べているように、近年の学力の変化の有無について関心が高まっている。前川他(2001)および前川他(2003)は、昭和59年から平成10年までの大学受験生の学力に関して、経年的な学力の上昇や下降といったシステムティックな傾向を見出すことはできなかった

とした。しかし、吉村他(2005)が、平成2年から平成16年までの大学受験生の英語学力の経年変化を調べた結果、平成8年以前に比べ、平成9年以降の能力値の平均が低かった。斉田(2003)が、平成7年から平成14年まで、茨城県の高1入学時の英語能力を調べた結果、平成10年に英語能力値の平均が大きく下がり、その後も下がり続けていた。

文部省は、平成10年12月14日に中学校学習指導要領を、平成11年3月29日に高等学校学習指導要領を改訂し、新しい教育課程（以下、「新課程」と言う。）の基準を、中学校では平成14年4月から、高校では平成15年4月から実施した。文

* 大学入試センター 研究開発部 試験評価解析研究部門
2007年11月30日 受理

表 1 在籍大学別被験者数

	A 大学		B 大学	C 大学	D 大学	E 大学	計
	文系	理系	文系	理系	教育系	理系	
旧課程群	43	48	18	23	44	33	209
新課程群	46	67	23	28	51	28	243
計	89	115	41	51	95	61	452

部省 (1999) によれば, 教育課程審議会の答申の中で示された外国語科全体及び高等学校外国語科の改善の 3 つの基本方針の全てに「実践的コミュニケーション」という語句が現れている. また, 高等学校の外国語科の「改訂の要点」を簡単にまとめると, ①外国語科の必修教科化, ②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と実践的コミュニケーション能力を養うことを目標とすること, ③従来の「言語活動」を「言語活動」と「言語活動の取扱い」の 2 つに分けて示すこと, ④言語材料の精選, ⑤「オーラル・コミュニケーション I」または「英語 I」を必修とすること, の 5 つである.

齊田 (2005) は, 平成 14 年から平成 17 年までの, 茨城県の高校生の入学時の英語学力について調べ, 中学校の新指導要領下で 1 年間英語教育を受けた中学生が高校に入学した平成 15 年度は, 旧指導要領下の最後の入学年度である平成 14 年度と学力差はみられなかったが, 平成 16 年度および平成 17 年度は高校入学時の英語学力が段階的に低下していたとした. では, 高校の学習指導要領改訂は, 英語学力に影響を与えただろうか. 本研究では, 東京都の国立大学 1 年生を対象に, 以前の教育課程 (以下, 「旧課程」と言う.) で高校教育を受け平成 17 年に現役で合格した者と, 新課程で高校教育を受け平成 18 年に現役で合格した者の英語学力に差があるかどうかを検討する. なお, 「英語学力」には様々な定義があり得るが, 本研究では「英語の試験で高い点数をとる能力」と定義し, センター試験の問題をもってこれを測定し得るものとする.

2 方 法

2.1 被 験 者

東京都にある 5 つの国立大学に在籍する大学 1

年生を対象とした. 調査は平成 18 年 1 月と平成 19 年 1 月の 2 回行い, 平成 18 年 1 月の調査では昭和 61 年 4 月 2 日以降に生まれた者, 平成 19 年 1 月の調査では昭和 62 年 4 月 2 日以降に生まれた者のデータを用いた. 以下, 前者を「旧課程群」, 後者を「新課程群」と言う. 旧課程群の被験者は 209 名, 新課程群の被験者は 243 名であった. その在籍大学の内訳は表 1 を参照されたい.

2.2 材 料

大学入試センター試験 (以下, 「センター試験」と言う.) の, 英語筆記およびリスニングの, 平成 18 年度追試験問題を用いた. 旧課程群には平成 18 年度追試験が行われたのと同じ日に解答させたので, 旧課程群にとってこの問題は初めて見る問題であった. また, 追試験問題は一般的に広く流布してはいないため, 平成 19 年 1 月に解答させた新課程群にとってもこの問題は初めて見る問題であったと考えてよいだろう.

2.3 分析方法

英語筆記およびリスニングの得点を従属変数とし, 新旧課程の別と, 受験者の在籍大学をいずれも固定効果要因とする, 被験者間 2 要因の分散分析を, それぞれの従属変数について行った. ただし, 新旧課程の別と在籍大学との交互作用は仮定しなかった. その理由は, 次のとおりである.

被験者は大学教育を約 1 年間受けているため, 英語の試験の得点に与える影響は無視できないと考えられる. そこで, 新旧課程の別に加え, 受験者の在籍大学も固定効果要因とした. 受験者の在籍大学は 5 種類であるが, そのうち 3 つの大学が文系と理系がはっきりしているものの, ひとつは教育系の大学であり文系と理系の区別がはっきりしない. また, もうひとつの大学は文系と理系の学生の学生がおり, 数において一方に極端に偏っ

表 2 平成 18 年度英語（筆記）の大問構成

大問番号	内容	配点
第 1 問	(A) アクセント (B) 文強勢	16
第 2 問	(A) 文法・語法 (B) 会話 (C) 語句整序	38
第 3 問	(A) 語句補充 (B) 文整序 (C) 文補充	34
第 4 問	図表読取	35
第 5 問	会話長文	32
第 6 問	長文読解	45

表 3 平成 18 年度英語リスニングの大問構成

大問番号	内容	配点
第 1 問	対話（一問一答）	12
第 2 問	対話（応答完成）	14
第 3 問	(A) 対話（一問一答） (B) 対話（表完成）	12
第 4 問	(A) 短文（一問一答） (B) 長文	12

ているとは言えない。文系と理系で教育内容は異なると考えられるため、この大学については、文系と理系をそれぞれ別の大学として扱った。

在籍大学によって、学生の課程間差が異なるとは考えにくいため、新旧課程の別と在籍大学との交互作用は仮定しなかった。したがって、新旧課程の別を j ($j=0$ は旧課程群, $j=1$ は新課程群であることを示す.), 在籍大学を k とし, j 課程で高校の教育を受けた k 大学の i さんの従属変数を Y_{jki} , 全体母平均を μ , 課程の主効果を α_j , 在籍大学の主効果を β_k , 誤差を ε_{jki} とすると, 次のようなモデルで分析を行ったことになる。

$$Y_{jki} = \mu + \alpha_j + \beta_k + \varepsilon_{jki}$$

このモデルを用いて, $\mu + \alpha_0$ と $\mu + \alpha_1$ の推定値を求め, 在籍大学の影響を除去した新旧課程別の修正平均値とした。

平成 18 年度の英語の試験は, 表 2 および表 3 のような大問で構成されていた。したがって, 新旧課程で, 得意な問題のタイプが異なるのかどうかを調べるため, それぞれの大問得点についても, 総得点の場合と同様の分析を行った。

3 結 果

3.1 テストの平均点の比較

筆記総得点およびリスニング総得点の度数分布

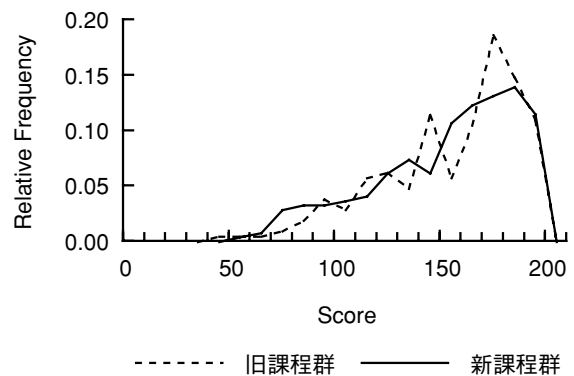


図 1 英語（筆記）総得点の相対度数分布

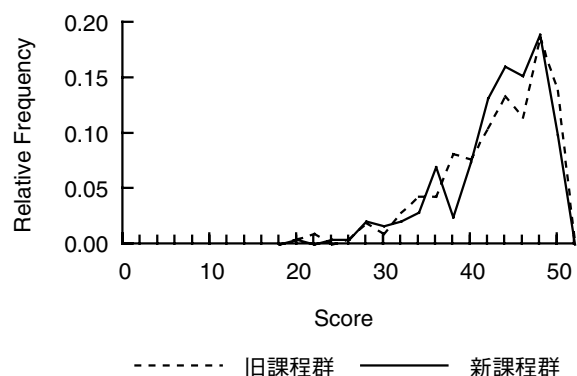


図 2 英語リスニング総得点の相対度数分布

は図 1 および図 2 のようになった。筆記・リスニングともに高得点の受験者が多く, 筆記の最頻値は, 旧課程群が 170 点以上 180 点未満の階級, 新課程群が 180 点以上 190 点未満の階級, リスニングの最

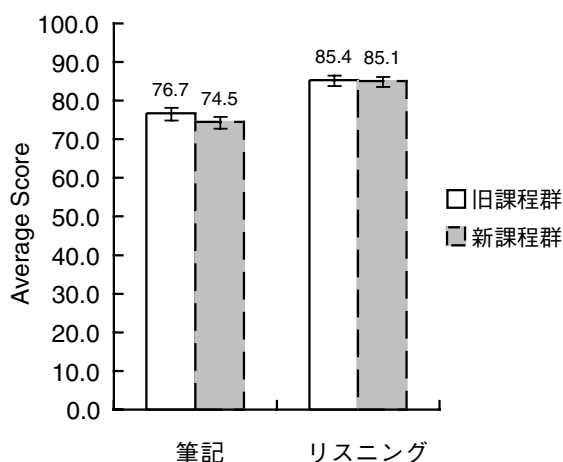


図3 在籍大学の影響を除去した英語（筆記）および英語リスニングの総得点（100点満点に換算）の修正平均値（エラーバーは95%信頼区間）

頻値は、旧課程群・新課程群ともに48点であった。各群の平均点は、筆記が、旧課程群154.57点、新課程群152.24点、リスニングが旧課程群42.83点、新課程群43.04点であった。対応のない t 検定をおこなったところ、筆記もリスニングも、旧課程群と新課程群の平均値差は5%水準で有意ではなかった（それぞれ、 $t(450) = 0.73$, $p = .4652$, $\sqrt{MSE} = 3.20$; $t(450) = 0.36$, $p = .7171$, $\sqrt{MSE} = 0.564$ ）。

在籍大学の影響を除去するために、筆記総得点およびリスニング総得点の平均について、交互作用を仮定しない被験者間2要因の分散分析を行った。このとき、水準によって被験者数が異なるため、タイプIIの平方和を用いた。その結果、筆記でもリスニングでも、課程の主効果は5%水準で有意ではなかった（それぞれ、 $F(1, 445) = 3.73$, $p = .0540$, $MSE = 565.47$; $F(1, 445) = 0.06$, $p = .8086$, $MSE = 24.11$ ）。

在籍大学の影響を除去したときの新旧課程別修正平均値は、筆記が、旧課程群153.39点、新課程群149.04点、リスニングが旧課程群42.68点、新課程群42.56点であった（図3）。旧課程群と新課程群とで、筆記の修正平均は200点満点で4.35点、リスニングの修正平均は50点満点で0.11点しか異ならず、95%信頼区間も重なっていた。

3.2 大問の平均点の比較

在籍大学の影響を除去したときの、筆記およびリスニングの各大問得点の新旧課程別修正平均値

は、筆記が図4、リスニングが図5のようになった。筆記の第6問の平均値差（課程の主効果）が5%水準で有意だったが、筆記およびリスニングの他の大問において、5%水準で有意な平均値差はなかった。それぞれの p 値は、筆記が第1問から順に.8638, .0541, .8046, .1035, .7191, .0420で、リスニングが第1問から順に.4445, .8267, .6922, .4401であった。

4 考 察

本報告では、旧課程で高校教育を受け平成17年4月にストレートで大学に入学してきた1年生（旧課程群）と、新課程で高校教育を受け平成18年4月にストレートで大学に入学してきた1年生（新課程群）に対し、大学1年次の1月に英語の筆記およびリスニングの共通問題を解答させ、その平均点を比較した。その結果、在籍大学の影響を除去しても、平均点に差があるとは言えなかった。大問ごとに平均点の比較も行ったが、筆記第6問において旧課程群の平均点が新課程群に比べ5%水準で有意に高かったが、他の大問では5%水準で有意な差が見られなかった。ただし、筆記第6問の、 p 値は.0420であり、検定の多重性を考えると、旧課程群の方が英語長文読解問題がよくできるとは必ずしも言えない。したがって、この5つの大学に平成17年と平成18年にストレートで入学してきた学生の間には、英語学力の差はほとんどないと言ってよいだろう。

では、この結果から、旧課程と新課程で英語学力に差はないと一般的に言えるだろうか。まず、この調査は、旧課程群も新課程群も、1年度ずつの学生しか対象にしていない。しかも、この調査の対象となった、平成18年1月における大学1年生と平成19年1月における大学1年生はそれぞれ、平成14年4月における高校1年生と平成15年4月における高校1年生であり、この年代の間に差はなかったとする斉田(2005)の結果と一致する。調査対象が、都内の一部国立大学の学生と、茨城県内の高校生という違いはあるものの、この後入学してくる大学生の学力は低下しているのか、変わらないのか、それとも上昇しているのか、継続して調査を行う必要がある。

次に、この調査の対象は、それぞれの課程で高

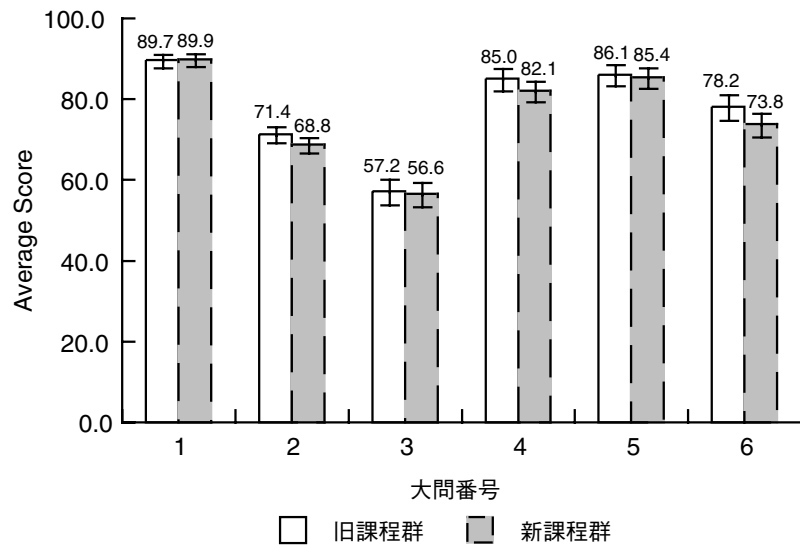


図 4 在籍大学の影響を除去した英語（筆記）の大問得点（100 点満点に換算）の修正平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

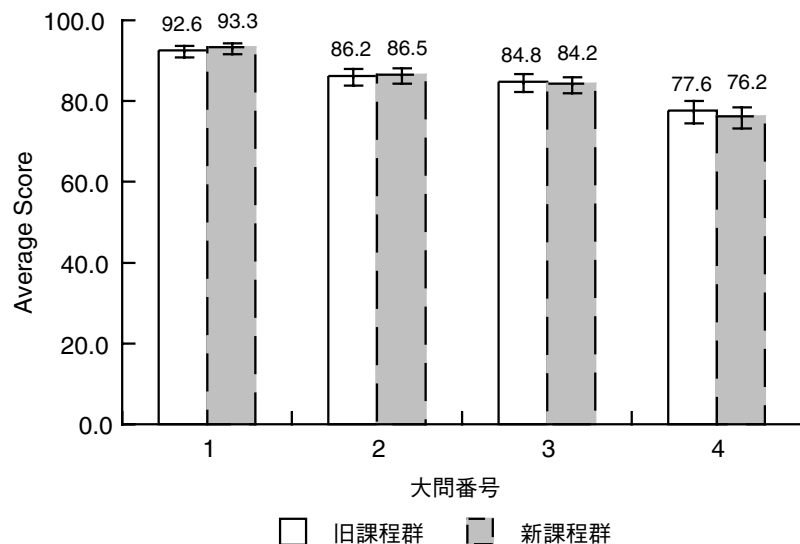


図 5 在籍大学の影響を除去した英語リスニングの大問得点（100 点満点に換算）の修正平均値（エラーバーは 95%信頼区間）

校教育を受けた学生を代表しているとは必ずしも言えない。なぜなら、いずれも難関とされる国立大学にストレートで合格した学生であり、同年代の平均的な学生よりも高い学力を有していると考えられるからである。中でも、全合格者に占める卒業見込者の割合を調べてみると、A 大学、D 大学、E 大学においては、平成 17 年度に比べて平成 18 年度の方が有意に高かった。したがって、この調査から言えるのは、「都内のある 5 つの国立大学にストレートで合格してきた学生については、旧

課程で高校教育を受けてきた学生と、新課程で高校教育を受けてきた学生との間に、英語学力の差があるとは言えない。」ということだろう。また、被験者は募集に応じた者で、無作為に抽出されたわけではないため、この結論も誤ったものである可能性を否定できない。

以上 2 つの理由から、新旧課程の間で学力に差がないのかどうかを調べるために、さらに詳細な調査および分析をすることが今後の課題である。

引用文献

- 市川伸一 (2002). 学力低下論争. ちくま新書.
- 前川眞一・石塚智一・菊地賢一・内田照久・中畝菜穂子 (2001). 大学入試センター試験得点の標準化の試み. 大学入試研究ジャーナル, **11**, 15-23.
- 前川眞一・菊地賢一・内田照久・中畝菜穂子・石塚智一 (2003). 大学入試センター試験得点の標準化の試み—項目反応理論による方法—. 大学入試研究ジャーナル, **13**, 81-87.
- 文部省 (1999). 高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編.
- 齊田智里 (2003). 高校入学時の英語能力値の年次推移—項目応答理論を用いた県規模英語学力テストの共通尺度化—. 第15回英検研究助成報告, 12-24.
- 齊田智里 (2005). ゆとり教育と英語学力低下 (2002-2005). 日本テスト学会第3回大会発表論文抄録集, 74-75.
- 吉村 宰・莊島宏二郎・杉野直樹・野澤 健・清水裕子・齋藤栄二・根岸雅史・岡部純子・サイモン フレイザー (2005). 大学入試センター試験既出問題を利用した共通受験者計画による英語学力の経年変化の調査. 日本テスト学会誌, **1**, 51-58.

Comparison of freshmen's English ability between students educated in different courses of study

HASHIMOTO Takamitsu*

Abstract

The course of study for upper secondary school was revised in 1999, and the first students educated in the new course took university entrance examinations in 2006 and entered universities. Is there any difference between students who were educated in the new course and students who were educated in the old course? In order to examine English ability of each of them, both students educated in old and new courses answered the same tests, supplementary tests of English (written) and English listening of the 2006 school year National Center Test, and average scores of them were compared. All examinees were freshmen who belonged to one of national universities located in Tokyo. The tests for freshmen educated in the old course were implemented on January 2006, and the tests for freshmen educated in the new course were implemented on January 2007. In both of written and listening tests, there was no significant difference of average scores between those students even when the effect of their belonging universities was controlled. In addition, average testlet scores were compared in order to investigate which area they were good at. In almost all testlets, differences of average scores were not significant. However, only students who graduated from secondary schools in the specific school years participated in this experiment. That is, students who were educated in each course and graduated in 2006 or after 2007 didn't participate. In addition, they didn't represent students educated in each course, because all of them passed rather difficult entrance examinations. So the result of this research could not be generalized. To confirm whether there is difference or not, more additional researches are needed.

* Department of Test Analysis and Evaluation, Research Division, National Center for University Entrance Examinations